

体育主任が考える理想の校内マラソン大会について

関 耕二・岡田 彩花・坂本 啓一・広沢 栄貴

The Ideal School Marathon Competitions for Chief teachers
of Physical Education Class

SEKI Koji, OKADA Ayaka, SAKAMOTO Keiichi, HIROSAWA Eiki

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第18巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.18 / No.1

令和3年 9月 10日 発行 September 10, 2021

体育主任が考える理想の校内マラソン大会について

関 耕二*・岡田 彩花**・坂本 啓一***・広沢 栄貴****

The Ideal School Marathon Competitions for Chief teachers of Physical Education Class

SEKI Koji*, OKADA Ayaka**, SAKAMOTO Keiichi***, HIROSAWA Eiki****

キーワード：校内マラソン大会，体育主任，テキストマイニング

Key Words : Marathon Competition of School, Chief Teacher of Physical Education Class, Text Mining

1. 緒言

近年，児童・生徒の体力低下が社会的に注目されているが，特に全身持久力は成人以降においても自身の健康と関連が強いといわれている．全身持久力を高める運動のひとつである持久走に対する児童・生徒の意識について，森本らは小学校1年生から高校3年生を対象として調査し，「持久走は好きですか」という質問に対して3件法で回答させた結果，「持久走が好き」と回答した者は全体の20.9%であり，「持久走が嫌い」と回答した者は47.0%であったと報告している¹⁾．また，露木らは小学校1年生から高校3年生を対象とした調査で，持久走に対する意識調査を実施した結果，持久走を「嫌い」と回答した者の割合は，男子において小学1年生では12%だったが，高校3年生では53%で増加しており，女子においても小学1年生では20%だったが，高校3年生では53%に増加していると報告している²⁾．このように，小学生から高校生までの児童・生徒は持久走嫌いが多く学年進行に伴って漸増していくと考えられる．一方，児童・生徒が持久走を嫌う理由については，「きつい・疲れる」などといった生理学的な理由¹⁾や，持久走において勝敗を競うことに否定的な児童・生徒が多いこと³⁾が報告されている．これらのことから，児童・生徒が持久走を嫌う理由は，高い運動強度や競争性に主要な要因があると考えられる．

児童・生徒における持久走嫌いに対しては，これまでに運動強度を緩和させることや競争性を軽減することなどに注目した体育授業に関する様々な研究がなされてきた．堀らは高校1年生を対象に主観的運動強度を目安にして自分に合ったペースで運動強度を調節して走る体育授業を行った結果，持久走に対して肯定的な回答が増加したと報告している⁴⁾．また，小磯らの研究では中学1年生を対象に主観的運動強度を目安にしたオープンペース走の体育授業を行い，「長距離は好きです」という質問に対して肯定的な回答が増加し⁵⁾，足立らの研究では小学1～6年生を対象に「スロージョギング持久走」の授業を1時間ずつ実施した結果，すべての学年で授業前より授業後において「持久走を楽しみますか？」という質問に対して肯定的な意識変化が認められた⁶⁾と報告している．このように，運動強度や競争性を調節することで持久走嫌いを減らすことを目的とした授業は，肯定的な意識を持つ児童・生徒を増加させるために効果的であると考えられる．

ところで，我が国の18歳以上の男女において，過去一年間にジョギング・ランニングを実施した人口は推計1019万人であり，2006年と比較して403万人増加していることや，週に1回以上，週に2回以上と定期的にジョギング・ランニングを行っている人口もそれぞれ274万人，167万人増加していることが2018年の笹川スポーツ財団調査で報告されて

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

**出雲市立遙基小学校

***鳥取市立岩美北小学校

****鳥取県教育委員会

いる⁷⁾。また、日本陸上競技連盟が公開している「市民マラソン・ロードレース運営ガイドライン」では、マラソン・ロードレース大会は日本陸上競技連盟の公認大会では年間160を超えており、非公認大会も併せると年間1500以上の大会が開催されていると記載されている⁸⁾。これらのことから、高校卒業以降のランニング人口は増加傾向にあり、市民マラソンのようなランニングイベントも数多く開催されている現状であるといえる。

さらに、市民マラソン大会の主催者はマラソン大会において健康増進、地元のPR及び観光等様々なテーマでマラソン大会を企画していることが指摘されているが⁸⁾、市民ランナーの大会で走る理由については、山口らが那覇マラソン参加者を対象に調査した結果、肯定的な回答が多かった項目は「自分への挑戦」、「体力の維持・向上」及び「体力の確認」であったと報告している⁹⁾。また、山口らは神戸マラソンの完走者を対象に市民マラソン大会の魅力について調査し、神戸マラソンの魅力を1人あたり最大3つのキーワードで回答させ、KJ法で分析した結果、応援、景色及びコースの順で多く抽出されたと報告している¹⁰⁾。これらのことから、多くの市民マラソン大会の中から市民ランナーに選択してもらうために、大会主催者はランナーのニーズに応じて自然、地形及び産業などの地域資源を活用したり、そのマラソン大会特有のテーマなど掲げたりしてマラソン大会に付加価値をつける工夫を行っていると考えられる。加えて、市民ランナーは主に自己の体力の維持・向上や自分への挑戦や確認といった動機でマラソン大会に出場しており、「応援」や「景色」、「コース」といったランナーにとって魅力的な走る環境が、18歳以上のランニング人口や市民マラソン大会の増加要因の1つであると考えられる。

一方、体育科及び保健体育科の授業以外で学校教育現場において行われている長い距離を走る運動としては、一般的に朝マラソン、業間マラソン、業間休みの体力づくり、持久走大会、校内マラソン大会及び清掃時体力アップ活動など多くの活動が実施されている。2017年度の全国・体力運動能力等調査報告書では、持久走大会（本研究では校内マラソン大会と同義として扱うこととした）は小学校において全体の67.4%、中学校では、全体の28.4%の学校で実施されており、小学校においては運動会に次いで2番目に多く実施されている体育的行事であり、中学校では運動会、球技大会に次いで3番目に多く実施されている体育的行事であると報告されている¹¹⁾。また、高等学校の校内マラソン大会の実施状況につ

いては、野本らは、埼玉県公立高等学校109校を対象に調査し、79校(72.4%)の学校が実施していると指摘している¹²⁾。このように、持久走大会や校内マラソン大会は学校行事として年間計画に位置付けられるなど、運動会や体育祭と並んで主要な体育的行事といえる。

以上のことから、成人以降のランニング人口やランニングイベントが増加しているにも拘わらず、依然として持久走嫌いの児童・生徒は多く存在し、体育授業以外の学校教育活動において「校内マラソン大会」が多くの学校で実施されているが、どのような意図や考えをもって教員が企画しているかは不明なままである。そこで、本研究では、体育主任が考える理想の校内マラソン大会について明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2-1. 対象

2016年に鳥取県内の小学校129校、中学校61校及び高等学校32校において、それぞれの学校で体育主任かそれに相当するような役割を担っている教員（以下、体育主任と示す）1名を対象に、アンケートを依頼した。その結果、アンケートの回答を得ることができた小学校教員75名（回収率58.1%）、中学校教員24名（回収率39.3%）及び高等学校教員12名（回収率37.5%）の体育主任計111名を分析対象とした。

尚、すべての調査は、学校長あるいは体育主任に研究の目的・内容について事前に書面にて説明し、同意書を得た上で実施した。

2-2. アンケート項目

教員の校内マラソン大会についての意識を明らかにするために、アンケートにより「あなたが思う理想の校内マラソン大会は、どのようなものですか。」と質問し、自由記述で回答させた。

2-3. 分析方法

得られた自由記述は、テキストマイニングツールSPSS Text Analytics for Surveys 4.0 (IBM社)を用いて『SPSS テキストマイニング入門(オーム社)』¹³⁾を参考に分析を行った。まず、自由記述の文章の文意を変えないように留意したうえで、綴り間違いなどの修正を行った。次に、言語的手法を用いて得られたテキストデータから出現したキーワードを抽出しカテゴリに分類した。さらに、それぞれのカテ

表 1 分析対象者の文章量及び単語数

学校種	分析対象者 (人)	文章数		単語数		分析対象のキーワード (語)
		(文)	(文/人)	(語)	(語/人)	
小学校	75	155	2.1	1017	13.6	1005
中学校	24	41	1.7	299	12.5	230
高等学校	12	37	3.1	302	25.2	262

ゴリにおけるキーワードの数量及び他のカテゴリとの繋がりや度合いを視覚化したカテゴリ Web などからカテゴリ間の関係を検討した。

表 2 小学校教員の回答におけるカテゴリ

順位	カテゴリ	キーワード数
1	力	32
2	自分	31
3	児童・生徒	29
4	目標	25
5	練習	17
5	応援	17
7	取り組む	14
8	記録	13
9	達成	11
10	成果	10
11	伸びる	9
12	中	8
13	全員	7
13	楽しい	7
13	実感	7
16	向上	6
17	地域	5
18	仲間	4
18	記録	4
18	保護者	4
18	心	4
22	体	3
23	大切	2

小学校教員 75 人の回答した 156 文の中から抽出したカテゴリのキーワードの数を表した。

3. 結果

3-1. 頻出語の抽出

「あなたが思う理想の校内マラソン大会はどのようなものですか。」という質問に対する体育主任による回答のうち分析対象となった文は、小学校 76 人から 156 文、中学校 24 人から 41 文、高等学校 12 人から 37 文であった。記述された文章は最も少ない人で 1 文、最も多い人で 11 文であり、自由記述のため文の量に個人差はあるが、対象者 1 人当たり平均で 2.1 文であった。また、キーワードの抽出を行ったところ、小学校で 1196 語、中学校で 289 語、高等学校で 302 語の語句が得られた。ここから、質問文に含まれる語（「校内マラソン大会」、 「マラソン大会」及び「思う」）、校内マラソン大会特有の語句（「走る」及び「大会」）及び単語では明確な意味を持たない単語（「ある」、「ない」、 「いう」及び「もっと」など）を不要語として削除した結果、小学校 1005 語、中学校 230 語、高等学校 262 語を分析対象のキーワードとした（表 1）。

3-2. 小学校教員の回答について

小学校教員の回答を用いてキーワードを抽出し、得られたキーワードを言語学的手法によってカテゴリにまとめ¹³⁾、含まれるキーワードの多いカテゴリを表 2 に示した。最もキーワードが多く出現したカテゴリは 32 回である「力」であり、31 回キーワードが出現した「自分」、28 回キーワードが出現した「児童・生徒」、25 回キーワードが出現した「目標」の順に多く抽出された。この最も多く出現した「力」というカテゴリに含まれるキーワードには、「どの児童も全力で走る」及び「みんなで全力を出し切る」などの「全力」、「走力の伸びが把握できる」及び

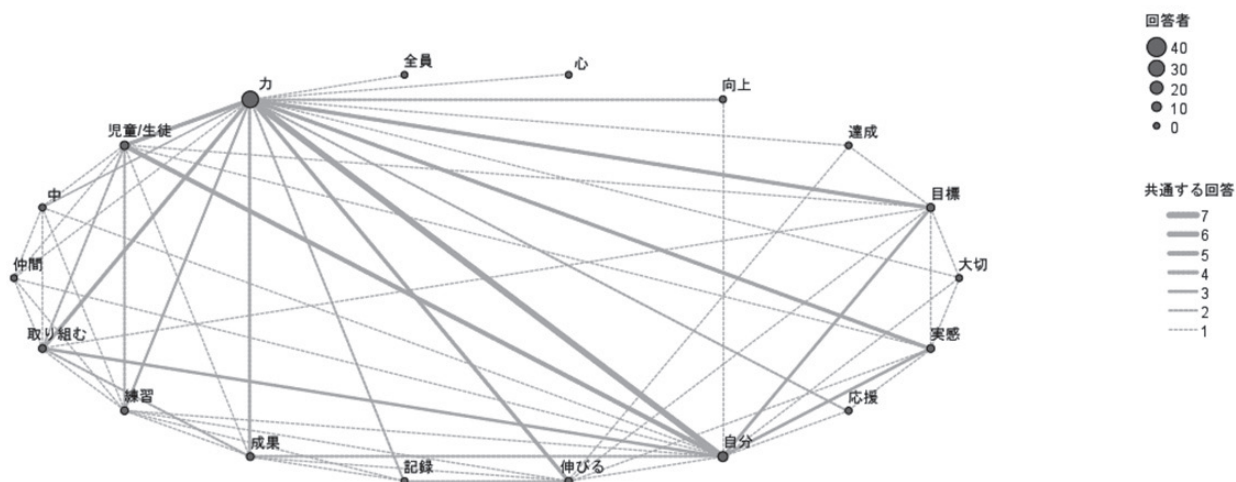


図1 小学校教員の回答における「力」のカテゴリ Web

「走力だけでなく」などの「走力」に関連するもの、「最後まで走りぬく精神力」及び「精神力を養う」などの「精神力」に関連するもの、「児童が自分の体力向上に意欲をもち」、「体力づくりの成果を表すことのできる大会」及び「自分の体力を知る」などの「体力」に関連するもの、「目標を設定する力」及び「走りぬく力」などの「～する力」という使われ方をしていた。これらのことから、小学校教員は校内マラソン大会を通して児童・生徒にこれらの「力」を発揮させることや、身につけさせることを理想としていると考えられる。

次に、小学校教員の回答におけるカテゴリ間の関係を明らかにするために、頻出上位のカテゴリである「力」、「自分」、「児童・生徒」、「目標」及び「練習」のそれぞれに含まれるキーワードと同じ文の中で使われたキーワードが含まれるカテゴリを抽出した。その結果、「力」というカテゴリに含まれるキーワードが使われた32文の中で、最も多く出現したキーワードが含まれるカテゴリは11回の「自分」であり、次いで7回の「児童・生徒」、5回の「目標」であった(図1)。また、「自分」というカテゴリに含まれるキーワードが使われていた31文の中で、最も多く出現したキーワードが含まれるカテゴリは14回の「目標」であり、次いで11回の「力」、10回の「取り組む」であった。さらに、「児童・生徒」というカテゴリに含まれるキーワードが使われていた31文の中で、最も多く出現したキーワードが含まれるカテゴリは12回の「自分」であり、次いで9回の「目標」であった。加えて、「目標」というカ

テゴリに含まれるキーワードが使われていた25文の中で、最も多く出現したキーワードが含まれるカテゴリは14回の「自分」であり、次いで9回の「児童・生徒」、8回の「取り組む」であった。最後に、「練習」というカテゴリに含まれるキーワードが使われていた17文の中で、最も多く出現したキーワードが含まれるカテゴリは7回の「目標」及び「児童・生徒」であり、次いで6回の「自分」、5回の「取り組む」であった。これらのことから、小学校教員は、児童自身の力や目標に向けて練習に取り組む一連の過程を含めた校内マラソン大会を理想としていると考えられる。

さらに、小学校教員の回答において頻出上位のカテゴリは「力」、「自分」、「児童・生徒」、「目標」及び「練習」であったが、それらのカテゴリと同じ文章には体育主任が児童・生徒に期待する教育効果が表現されている動詞の「できる」や「伸びる」が多く使われていると仮定した。そこで、小学校教員の回答のうち「できる」及び「伸びる」のそれぞれが使われていた文を対象に、同じ1文に出現しているだけでなく、尚且つそこに「係る語」と「受ける語」の関係が成り立っているかどうかについて係り受け分析を『SPSSによるテキストマイニング入門(オーム社)』¹³⁾を参考に実施した。まず、小学校教員の回答において「できる」というカテゴリに含まれるキーワードが使われていた24文を対象に、係り受け分析を行った結果、最も多く出現したカテゴリはそれぞれ7回の「児童・生徒」及び「目標」であり、次いで5回の「自分」、4回の「力」、それぞれ

表 3 小学校教員の回答における「できる」と同じ文の中で使われたカテゴリ

順位	カテゴリ	出現回数
1	児童・生徒	7
1	目標	7
3	自分	5
4	力	4
5	成果	3
5	取り組む	3

小学校教員 75 人の回答した文のうち「できる」が出現した 24 文を対象に係り受け分析により抽出されたカテゴリを表した。

表 4 小学校教員の回答における「伸びる」と同じ文の中で使われたカテゴリ

順位	カテゴリ	出現回数
1	力	4
2	自分	2
2	目標	2
2	練習	2
3	成果	1

小学校教員 75 人の回答した文のうち「伸びる」が出現した 7 文を対象に係り受け分析により抽出されたカテゴリを表した。

3 回の「成果」及び「取り組む」であった（表 3）。同様に、「伸びる」というカテゴリに含まれるキーワードが使われていた 7 文を対象に、係り受け分析を行った結果、最も多く出現したカテゴリは 4 回の「力」であり、次いでそれぞれ 2 回の「自分」、「目標」及び「練習」であった（表 4）。これらの結果は、小学校教員の回答において頻出上位であったカテゴリとほぼ同じであり、それぞれのカテゴリにおいて「できる」や「伸びる」と関連が強いことが考えられる。

以上のことから、本研究における小学校教員の理想の校内マラソン大会は、児童のそれぞれの力を伸ばしたり目標を持ったりすることに注目して、それらの達成のため練習に取り組むという一連の過程を

表 5 中学校教員の回答におけるカテゴリ

順位	カテゴリ	キーワード数
1	目標	9
1	生徒	9
1	自分	9
4	設定	4
5	全力	3
5	力	3
5	認める	3
5	挑戦	3
5	成果	3
5	達成	3
5	楽しい	2
12	つなげる	2
12	意欲的	2
12	仲間	2
12	頑張り	2
12	前向き	2
12	応援	2
12	記録	2
12	実施	2

中学校教員 24 人の回答した 41 文の中から抽出したカテゴリのキーワードの数を表した。

大切にしていける大会を理想としていることが明らかとなった。

3-3. 中学校教員の回答について

中学校教員の回答を用いてキーワードを抽出し、得られたキーワードを言語学的手法によってカテゴリにまとめ¹³⁾、含まれるキーワードの多いカテゴリを表 5 に示した。最もキーワードが多く出現したカテゴリはキーワードの出現がそれぞれ 9 回の「目標」、「生徒」及び「自分」であった。

「自分」というカテゴリは小学校教員の回答において 2 番目に多く出現し、中学校教員の回答におい

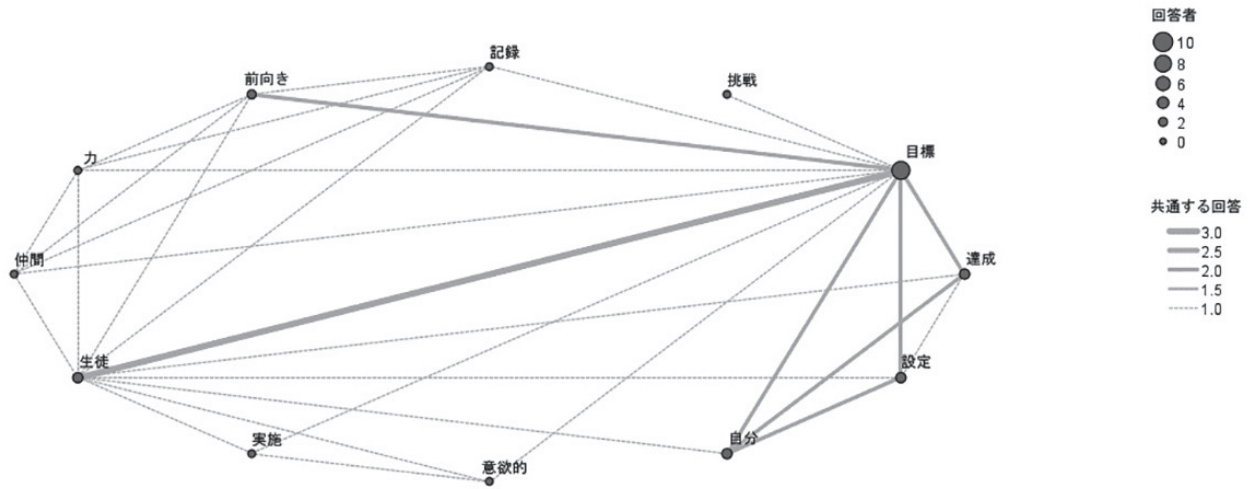


図2 中学校教員の回答における「目標」のカテゴリ Web

で最も多く出現したが、この「自分」というカテゴリに含まれるキーワードは「自分の目標をもち」、「自分の体力向上に意欲をもち」、「自分の記録向上に向けて意欲的に取り組む」、「自分を振り返る」及び「自分の頑張りを確認する」という使われ方をしていた。これらのことから、小学校及び中学校教員が思う理想の校内マラソン大会は、個人の体力や頑張りなど個人内の技能や態度などを重要視していると考えられる。

次に、中学校教員の回答におけるカテゴリ間の関係を明らかにするために、頻出上位のカテゴリである「目標」、「自分」及び「生徒」のそれぞれに含まれるキーワードと同じ文の中で使われたキーワードが含まれるカテゴリを抽出した。その結果、「目標」というカテゴリに含まれるキーワードが使われた9文の中で、最も多く出現したキーワードが含まれるカテゴリはそれぞれ3回の「設定」、「生徒」、「達成」及び「自分」であった(図2)。また、「自分」というカテゴリに含まれるキーワードが使われた9文の中で、最も多く出現したキーワードが含まれるカテゴリは4回の「生徒」であり、次いで3回の「目標」、それぞれ2回の「設定」、「挑戦」、「達成」及び「頑張り」であった。さらに、「生徒」というカテゴリに含まれるキーワードが使われた9文の中で、最も多く出現したキーワードが含まれるカテゴリは4回の「自分」であり、次いで3回の「目標」であった。これらのことから、本研究における中学校教員は、生徒個人の目標を設定し、目標に向かって挑戦することや目標を達成するために頑張ること

ができる校内マラソン大会を理想としていると考えられる。

3-4. 高等学校教員の回答について

高等学校教員の回答を用いてキーワードを抽出し、得られたキーワードを言語学的手法によってカテゴリにまとめ¹³⁾、含まれるキーワードが多いカテゴリを表6に示した。最もキーワードが多く出現したカテゴリはキーワードの出現が7回の「生徒」、次いで6回の「必要」、5回の「考える」及び「仕掛け」であった。

次に、高等学校教員の回答において、頻出上位のカテゴリである「生徒」に含まれるキーワードが使われた7文の中で、最も多く出現したキーワードが含まれるカテゴリはそれぞれ2回の「主体的」及び「必要」であった(図3)。この「生徒」というカテゴリと「主体的」というカテゴリが同じ文の中では、「生徒が主体的に企画運営に携われる」などの使われ方が多かった。これらのことから、高等学校の教員は生徒の主体性を尊重する校内マラソン大会を理想としていることが考えられる。

「仕掛け」というカテゴリは高等学校教員の回答において3番目に多く出現し、「実施」、「距離」というカテゴリは5番目に多く出現した。「仕掛け」、「実施」及び「距離」は、高等学校教員の回答において特に多く出現したカテゴリであり、理想の校内マラソン大会をどのように運営・実施するかという回答であると考えられる。このような校内マラソン大会の実施・運営についての視点は、本研究におけ

表 6 高等学校教員の回答におけるカテゴリ

順位	カテゴリ	キーワード数
1	生徒	7
2	必要	6
3	考える	5
3	仕掛け	5
5	設定	4
5	実施	4
5	距離	4
5	楽しい	4
9	目標	3
10	能力	2
10	挑戦	2
10	生涯	2
10	順位	2
10	主体的	2
10	企画	2
10	安全面	2
10	達成感	2
10	地域	2

高等学校教員 12 人の回答した 37 文の中から抽出したカテゴリのキーワードの数を表した。

小学校及び中学校教員の理想とする身につけさせたい力や目標といった視点とは異なる視点であった。これまでに、市民ランナーにとってのマラソン大会やランニングの魅力として、「景色」及び「コース」といった走る環境が指摘されているが^{10,14)}、本研究における高等学校教員の回答で出現した「仕掛け」、「実施」及び「距離」も走る環境に注目しているカテゴリと考えられる。したがって、これらはランニングの魅力を生徒に実感させるためには必要な視点であり、高等学校教員はそういった視点を持っている可能性がうかがえた。

以上のことから、本研究における高等学校教員は、生徒の主体性を尊重する校内マラソン大会を理想としながら、生涯スポーツとしてのランニングの魅力を生徒に実感させることも意識していると考えられる。

4. 考察

4-1. 学習指導要領との関連について

学校教育活動内における校内マラソン大会の位置づけを学習指導要領の記載から検討すると、体育科及び保健体育科においては、小学校 1 年生から 4 年生では体づくり運動領域において「一定の速さでのかけ足」という例示があり、1 年生及び 2 年生は「無理のない速さでかけ足を 2~3 分間程度続ける」、3 年生及び 4 年生は「無理のない速さでかけ足を 3~4 分続ける」と示されている箇所が校内マラソン大会と関連があると考えられる。また、5 年生及び 6 年生では体づくり運動領域の「動きを継続する能力を高めるための運動」という例示があり、「無理のない

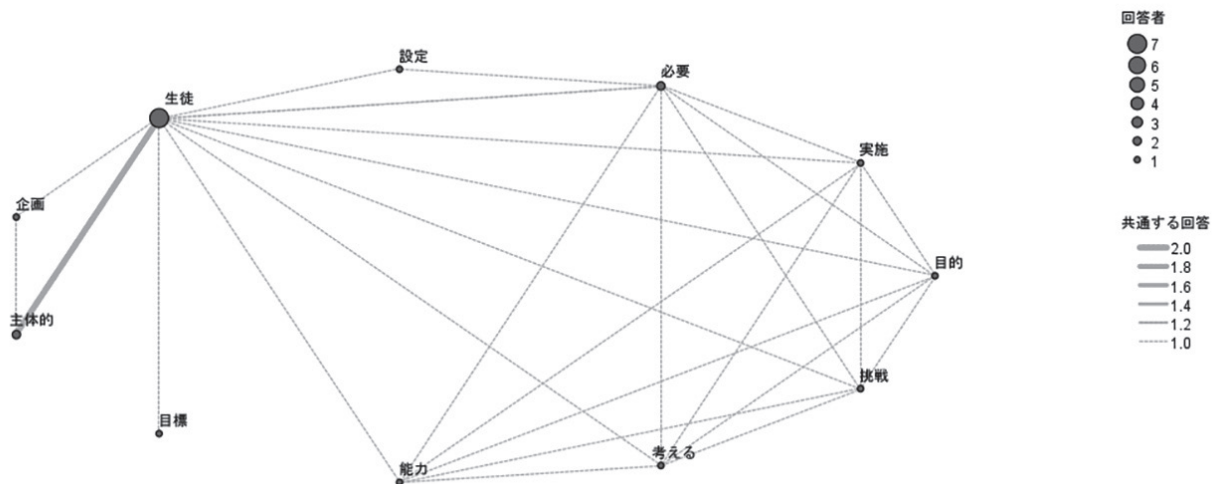


図 3 高等学校教員の回答における「生徒」のカテゴリ Web

速さで5~6分程度の持久走をする」と示されている¹⁵⁾。さらに、中学校では1年生と2年生において体づくり運動領域の「動きを持続する能力を高めるための運動」として「走や縄跳びなどを、一定の時間や回数又は、自己で決めた時間や回数を持続する」と示されている¹⁶⁾記載が校内マラソン大会と関連があると考えられる。これらのことから、小学校、中学校1年生及び2年生において校内マラソン大会は体育科及び保健体育科の体づくり運動と関連づけて位置づけられている可能性が考えられる。加えて、中学校及び高等学校の保健体育科学習指導要領では、1年生から3年生までの陸上競技領域の「長距離走」において「自己に適したペースを維持して、一定の距離を走り通し、タイムを短縮したり、競走したりできるようにする」と示されている^{16,17)}。このように、中学校及び高等学校において校内マラソン大会は保健体育科の長距離走と関連づけて位置づけられている可能性が考えられる。一方、特別活動学習指導要領では、小学校、中学校及び高等学校ともに学校行事の健康安全・体育的行事の内容として「心身の健全な発達や健康の保持増進、運動に親しむ態度の育成、体力の向上」と示されている部分が校内マラソン大会の内容と関連のある記載であると考えられる¹⁸⁻²⁰⁾。

以上のことから、学習指導要領に基づいて考えると多くの学校教育現場において校内マラソン大会は、体育科及び保健体育科の体づくり運動領域(持久走を含む)や陸上競技領域の長距離走、又は特別活動における健康安全・体育的行事として位置づけられていると考えられる。

本研究において、理想の校内マラソン大会に対する回答に頻出した「児童・生徒」というカテゴリは小学校教員の回答において3番目に多く出現し、中学校及び高等学校教員の回答においては「生徒」というカテゴリが1番目に多く出現した。この「児童・生徒」及び「生徒」というカテゴリに含まれるキーワードは「児童が」、「生徒が」及び「生徒一人一人が」というような使われ方をしていた。これらのことから、体育主任は、児童・生徒を校内マラソン大会の主体とすることを理想としていると考えられる。また、「目標」というカテゴリは小学校教員の回答において4番目に多く出現し、中学校教員の回答において最も多く出現したが、この「目標」というカテゴリに含まれるキーワードは「一人一人が目標をもって」、「自分の目標をもつ」、「目標に向かって」及び「目標を達成しようとする」という使われ方をしていた。これらのことから、小学校及び中学

校教員は、長い距離を走るだけでなく目標をもって臨む校内マラソン大会や、各自の目標を達成できる校内マラソン大会を理想としていると考えられる。

学習指導要領における体育の目標及び内容では体育科の思考力・判断力・表現力等の目標において、小学校では「運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う」¹⁵⁾、中学校では「運動や健康についての自他の課題を発見し、合理的な解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う」¹⁶⁾と示されている。言い換えれば、学習指導要領に記載されている自己及び自他の課題をみつけるということは、目標をもって取り組むということにつながると考えられる。また、学習指導要領における特別活動の基本的な性格と教育活動全体における意義として小学校及び中学校において「複雑で変化の激しい社会をたくましく生きていかなければならない児童・生徒にとっては、多様な他者と共同して創造的に課題を解決する力や、希望や目標をもって生きる態度を身に付けることが重要である」^{18,19)}と示されており、体育的行事が含まれている特別活動の中では目標をもつことの重要性が記されている。

以上から、本研究における小学校及び中学校教員の考える理想の校内マラソン大会は、児童・生徒が各自の目標をもてる大会であり、校内マラソン大会と関連する教科の学習指導要領の目標や意義において「目標をもって取り組む」と記載されていることから、学習指導要領の内容と近い考え方であるといえる。

また、本研究における理想の校内マラソン大会に対する小学校教員の回答において、最も頻出したカテゴリは「力」であり、体力の向上を意図した回答が多かった。学習指導要領においては、体育科及び保健体育科の目標において体力の向上に関する記載があるが¹⁵⁾、特別活動においても「体力の向上に資すること」が健康・安全体育的行事のねらいの中に定められている¹⁸⁾。したがって、本研究における小学校教員の理想とする校内マラソン大会において、体力の向上については体育科の目標及び特別活動の学習指導要領の健康・安全体育的行事のねらいと一致しているといえる。さらに、本研究における理想の校内マラソン大会に対する高等学校教員の回答においては、「主体性」や「仕掛け」といったカテゴリが頻出したが、保健体育科の目標¹⁷⁾に記載されているように、「生涯にわたって」運動を継続するというような生涯スポーツとしてのランニングとの関連が考えられた。

以上のことから、本研究における体育主任が考える理想の校内マラソン大会は、学習指導要領に準拠していると考えられた。このことは、本研究では学校教育活動内のランニングイベントである校内マラソン大会の理想型を質問したので当然ではあるが、各学校において様々な事情が影響するとはいえ、学習指導要領を逸脱しない範囲でそれぞれの教員が考える理想に近い大会を実施している可能性が推察される。

4-2. 市民マラソン大会との比較について

本研究における理想の校内マラソン大会に対する体育主任の回答で、これまでの検討から頻出したカテゴリのなかでも特徴的なものに、小学校教員のカテゴリでは「練習」があり、中学校教員のカテゴリでは「挑戦」や「達成」があり、高等学校教員では「仕掛け」や「主体性」があった。また、全ての学校種の教員に共通する理想の校内マラソン大会としては、児童・生徒の力や目標など個人を重視するものであった。

一方、齋藤らは市民ランナーが感じているランニングの魅力を形成する要素として、「人財」、「競走・達成」、「場との対話」、「成功体験」、「自己の確立」及び「ウェルネス」を示している¹⁴⁾。本研究の中学校教員における理想の校内マラソン大会では、「目標を達成すること」及び「自分に挑戦すること」のような個々の「挑戦」や「達成」が意識されていると考えられるので、この市民ランナーのランニングの魅力のうち「競争・達成」が共通している。また、高等学校の体育主任が考える理想の校内マラソン大会である「仕掛けをすることや適切な距離を設定して実施すること」というような校内マラソン大会の運営に関する点について、市民ランナーがランニングの魅力として感じているランニングを取り巻く環境の充実などからの「場との対話」という要素¹⁴⁾や「景色」、「コース」といった走る環境¹⁰⁾と共通している視点であると考えられる。しかし、自分なりにペースや運動強度をコントロールできるようになることなどの「ランニングする自己の確立」、生活の改善とランニングの双方向的な改善などの「ウェルネス」、ランニングを取り巻く環境の充実などからの「場との対話」という要素¹⁴⁾については、本研究の小学校及び中学校教員が理想としている校内マラソン大会では、それらの意識が低いと考えられる。また、本研究では児童・生徒同士の関わりや「応援」についても小学校教員の回答のみに記述が多くあり、中学校及び高等学校教員の回

答では少なく、他者からの賞賛やほかの一般市民ランナーとともに走ることによって集団のリズムの心地よさを感じるなどの「人財」というランニングの魅力形成する要素に対する意識が低いと考えられる。

学校教育活動において体育・保健体育の授業での「持久走」及び「長距離走」や校内マラソン大会など多くの場面で長い距離を走る運動が実践されている。露木らが小学校1年生から高等学校3年生を対象に持久走に対するイメージを調査した結果、小学生の「持久走」に対するイメージは「マラソン」に近かったと指摘している²⁾が、児童・生徒の意識としては校内マラソン大会に向けた体育・保健体育の授業や、学校で扱われる「持久走」及び「長距離走」が混同しており、長い距離を走る運動に対する意識は複合的に形成されると考えられる。したがって、児童・生徒が持久走を嫌う理由として「きつい・疲れる」といった身体的・精神的な負荷や勝敗を争うことに対して否定的であることが指摘されているが^{1), 3)}、本研究における校内マラソン大会に対する教員の回答で頻出した「力」の向上のうち特に児童・生徒の「体力」及び「走力」の向上、競走や勝敗に対して過度に意識した競走型の校内マラソン大会を企画することによって、児童・生徒が持久走と同様に校内マラソン大会に対して否定的な意識を持つ可能性が考えられる。

さらに、本研究における校内マラソン大会に対する回答で、小学校教員では「練習」があり、中学校教員では「挑戦」が頻出したカテゴリであったが、校内マラソン大会が体育・保健体育科あるいは特別活動であるかに関わらず、大会に向けた「練習」が体育・保健体育授業で実施されることが多いと推察される。その場合、体育・保健体育授業において校内マラソン大会での順位や記録の向上のために、児童・生徒の個々の「力」や「目標」に「挑戦」することに焦点が置かれすぎると、学習指導要領に記載があるように「無理のないやさし」や「自己に適したペース」ではなく、「きつい・疲れる」といった高強度で高負荷のランニングが実践される可能性が考えられる。その結果、いわゆる児童・生徒の持久走嫌いを形成する一因となるであろう。

以上のことから、本研究において体育主任が考える理想の校内マラソン大会は、市民ランナーが感じているランニングの魅力の一部しか含まれておらず、校内マラソン大会が持久走嫌いの一因となる危険性を有していると考えられた。

5. 結語

本研究では、体育主任の考える理想の校内マラソン大会について明らかにすることを目的として、体育主任を対象としたアンケートを用いてテキストマイニング分析を行った結果、以下のことが明らかとなった。

・小学校教員の理想の校内マラソン大会は、児童のそれぞれの力を伸ばしたり目標を持ったりすることに注目して、それらの達成のため練習に取り組むという一連の過程を大切にしていこうと理想としていることが明らかとなった。

・中学校教員は、生徒個人の目標を設定し、目標に向かって挑戦することや目標を達成するために頑張ることができる校内マラソン大会を理想としていると考えられた。

・高等学校教員は、生徒の主体性を尊重する校内マラソン大会を理想としながら、生涯スポーツとしてのランニングの魅力を生徒に実感させることも意識していると考えられた。

・体育主任が考える理想の校内マラソン大会は、学習指導要領に準拠していると考えられた。

・体育主任が考える理想の校内マラソン大会は、市民ランナーが感じているランニングの魅力の一部しか含まれておらず、校内マラソン大会が持久走嫌いの一因となる危険性を有していると考えられた。

以上のことから、体育主任の考える理想の校内マラソン大会の特徴である、個々の力を伸ばすことや目標の達成を大切にすると同時に、市民ランナーの感じているランニングの魅力を児童・生徒がより実感できる大会を企画・運営することによって、児童・生徒の持久走嫌いの軽減につながっていくと期待される。

本研究の結果は、対象となった教員の学校種に偏りはあるものの、特に小学校教員の考える理想の校内マラソン大会については明確になったと考えられる。今後は、さらに多くの教員に対して回答を得ることと、より具体的な校内マラソン大会の運営方法の検討が課題である。

謝辞

本研究を実施するにあたり、ご理解とご協力いただきました各校の校長及び教員の皆様に心より感謝いたします。また、本研究を遂行するにあたり、有意義な議論と協力をいただいた福田知里氏及び若林和歩氏にも心より感謝いたします。

文献

- 1) 森本和浩・松尾綾・北嶋康雄・中潟崇・遠藤宗洋・清永明・田中宏暁 (2010) 児童・生徒の持久走に対する意識調査, ランニング学研究, 22(1), pp115-117.
- 2) 露木亮人・関耕二・岩田昌太郎 (2016) 児童・生徒の持久走に対する意識の違いに関する横断的研究, 山陰体育学研究, 31, pp26-35.
- 3) 長澤光雄 (1993) 学校体育における持久走に関する一考察, 秋田大学教育学部研究紀要教育科学, 44, pp1-10.
- 4) 堀健太郎・黒川隆志 (2003) 高校体育授業における持久走の指導法に関する研究, 体育学研究, 48, pp667-677.
- 5) 小磯透・小山浩 (2012) 中学校長距離走授業におけるオープンペース走学習の成果, 発育発達研究, 55, pp11-22.
- 6) 足立稔・酒向尚子・笹山健作・妹尾健一郎 (2014) 小学生を対象にしたスロージョギング持久走についての実践的研究, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 157, pp61-66.
- 7) 笹川スポーツ財団 (2018) スポーツライフ・データ 2018, 笹川スポーツ財団, 81 - 91
- 8) 公益財団法人日本陸上競技連盟 (2013) 市民マラソン・ロードレース運営ガイドライン.
- 9) 山口志郎・佐々木朋子・山口泰雄・野川春夫 (2011) マラソンランナーの参加動機と Push-Pull 要因に関する研究: NAHA マラソンに終える県内・県外参加者に着目して, 神戸大学大学院人間開発環境学研究科研究紀要, 4 (2), pp57-67.
- 10) 山口泰雄 (2016) 「第5回神戸マラソン」参加者に関する調査報告書, 神戸大学大学院人間発達環境研究科 生涯スポーツ研究室, pp37-41.
- 11) スポーツ庁 (2017) 全国体力・運動能力, 運動習慣等調査報告書, pp152.
- 12) 野本忠雄・片岡暁夫・荘司正徳・桑田陽義・小原晃・新保淳 (1986) 持久性競争に関するスポーツ教育学的研究—埼玉県公立高等学校の調査資料に基づいて, スポーツ教育学研究 6(1), pp21-36.
- 13) 内田治・川嶋敦子・磯崎幸子 (2014) 『SPSS によるテキストマイニング入門』, 株式会社オーム社, pp26 - 147.
- 14) 斎藤祐一・鈴木直樹 (2016) ランニングの魅力が形成されるプロセスに関する研究—学習者にとっての魅力を中心とした持久走の学習を求めて—, 体育科教育学研究 32 (2), pp19-32.

- 15) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説体育編
- 16) 文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説保健体育編.
- 17) 文部科学省（2018）高等学校学習指導要領解説保健体育編.
- 18) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説特別活動編.
- 19) 文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説特別活動編.
- 20) 文部科学省（2018）高等学校学習指導要領解説特別活動編.